白河高校新聞

発行所
白河市南登り町54
福島県立白河高校
出版委員会
委員長　邊見 汐里
☎0248(24)1116

インターハイ予選

快挙続々 快進撃の登龍生

5月から6月にかけて行われた福島県高等学校体育大会において、たくさんの白高生が活躍し、その雄姿を見せてくれた。また、女子剣道部は全国大会へ、男子ソフトテニス部と水泳部は東北大会、女子卓球部も創部以来初、県南地区では数十年ぶりの東北大会出場への切符を手にした。

快挙を成し遂げた女子卓球部

インターハイ予選結果

（県大会出場以上掲載）

（敬称略）

〈女子剣道〉
団体戦　1位　全国大会出場
個人戦
1位　丹野菜々子　全国大会出場
3位　井上桃花　東北大会出場
小林絵里　東北大会出場

〈女子卓球〉
団体戦　5位　東北大会出場
シングルス　ベスト32　喬橋史佳、緑川綾音
ダブルス　喬橋史佳・緑川綾音
ベスト8　柳沼ちかい　東北大会出場

〈男子卓球〉
ダブルス
滝田大己・稲川陽亮　ベスト32
団体戦　出場
シングルス
稲川陽亮、滝田大己、余西恵太朗、遠藤毅人、根本享摩、早津慧、堀越雄太、小松駿斗、佐藤悠麗
ダブルス
佐藤悠麗・余西恵太郎

〈男子ソフトテニス〉
個人戦　ダブルス
ベスト8　吉田耀・薄井海斗　東北大会出場
ベスト32　鈴木琉斗・尾股隼太朗
野崎純輝・小島大空
緑川陽斗・舟山直太
団体戦　ベスト8

〈男子陸上〉
100m　北島圭吾、小室旬悟
400mH　柏木秀斗
走幅跳　和田佳大、大谷泰基
走高跳　廣瀬大紀
槍投げ　大谷泰基
4×100mリレー　大谷泰基、柏木秀斗、北島圭吾、小室旬悟

〈女子陸上〉
400m　塩田彩華
100mH　目黒倫
棒高跳　青砥和奏、須藤咲季
4×100mリレー　塩田彩華、目黒倫、須藤咲季、佐藤真悠子

〈男子バレーボール〉
ベスト16

〈女子バレーボール〉
ベスト8

〈女子弓道〉
団体戦　5位

〈水泳〉
200m個人メドレー　6位　栗原美海　東北大会出場
400m個人メドレー　4位　栗原美海　東北大会出場

〈男子バドミントン〉
団体戦　出場
個人戦　ダブルス
兼子輝人・佐藤匠
佐藤汰市・小菅健太朗
シングルス
佐藤匠、兼子輝人

〈女子バドミントン〉
団体戦　出場

喜びの瞬間を分かち合う女子剣道部

元生徒会長が語る想い

生徒を支えるリーダーとして

6月9日に生徒会役員選挙が行われた。新しい生徒会役員が決まったところで、今まで真摯に活動をし、任期を果たした元生徒会長の寺山華さん（3―2）にお話を伺った。

Q　どのような時にやりがいを感じましたか？

A　スポーツ大会や登龍祭などの行事を運営する時です。一生の思い出になるような行事に運営として関われて、とてもありがたく思います。また、生徒や先生が楽しんでいるところを見ると、「やって良かったな」と安心することができました。

Q　生徒会長を経験して成長できたと思うことは何ですか？

A　私は活動をしている時に1人で抱え込んでしまうことが多かったのですが、周りの仲間が助けてくれて、私は1人ではないと感じたことがありました。「協力」の大切さを学ぶことができ、周りの力も頼るという点では、成長できたと思います。

Q　活動の中で大変なことをどうやって乗り越えましたか？

A　大変なこともありましたが、それ以上に楽しいことの方が多かったです。ただ、運営などの計画立ての段階で、細かいチェックを念入りにすることなどが辛く感じる場面もありました。しかし、周りの人が助けてくれたこともあり、頑張ることができました。大変なことを乗り越える際に、やはり周りの人というのはとても心強い存在だということに気付かされました。

Q　自身が生徒会長の間で、何か生徒の変化を感じましたか？

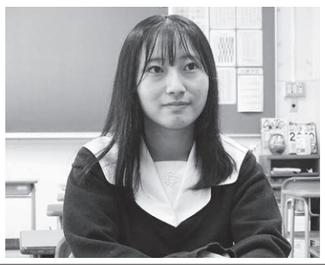
A　積極的に意見を出してくれる生徒が増えたと感じました。「白河高校をより良い学校にしたい！」と考えてくれている生徒が多いということを知り、とても嬉しかったのを覚えています。

Q　生徒会長という経験を、今後どのように活かしていきたいですか？

A　私の将来の夢は中学校の教員です。そこで、生徒会長という役職でリーダーシップを培った経験を大学などでさらに磨き、教員になって発揮したいと思っています。リーダー性には自信があるので、頑張っていきたいと思います。

Q　最後に今の生徒会に何か言いたいことはありますか？

A　「話し合い」を大切にして欲しいと思っています。白河高校は今年で100周年を迎えました。そんな中、生徒・先生双方とも良い学校生活が送れるように、「話し合い」をして欲しいです。また、楽しむ時は楽しみ、真面目にやるときは真面目にやること。「メリハリ」を大切にして欲しいです。白河高校を今よりさらに良い学校にしてくれることを楽しみにしています。


生徒会に思いを馳せる寺山さん

人と地域との紐帯役として

EMANONインタビュー

EMANONは白河市にある古民家カフェで、高校生蟲屑を銘打っている。高校生に寄り添うカフェとして、地域とどのように関わっていくのか、EMANONのスタッフである鈴木冴佳さん、鈴木理久さんにお話を伺った。

Q　白河市に店を出そうと決意したきっかけは何ですか？

A　白河市で、高校生に対して何ができたらと思い、築90年の古民家を地元の方々と協力し、リノベーションしました。高校生にもDIY作業に参画してもらい、高校生の家庭、学校以外のサードプレイスとして2016年にEMANONをオープンしました。

Q　高校生蟲屑と銘打っていますが、それは何故ですか？

A　白河市内には大学がないため、進学を機に、白河市から大学のある地域へと流れ、大学卒業後も白河市に戻って来る人はあまりいません。ですので、高校在学時が白河市で過ごす最後の時間になってしまいます。貴重な高校3年間を無為に費やしてしまうのは勿体ないため、将来白河市に関わりを持ってもらえるように、高校生蟲屑を銘打って積極的に活動をしています。

また、大学がないということは、大学生について知る機会がないということなので、高校生達に自らの将来像を描いてもらうためにも、進路相談や、大学について話をしています。

Q　EMANONは地域とどのように関わっていく予定ですか？

A　親や教師のような関係でなくナナメの関係（親や教師には相談しづらいことでもしやすい）として高校生の居場所を提供することで、高校生の活動の拠点としてやりたいことをチャレンジするサポートをしていきます。草刈りなどの手伝いといった些細なことから、徐々に大きなチャレンジをしていってもらいたいです。そのために、地域のお店に協力してもらうこともあります。地域全体が高校生蟲屑の街になれば、高校生が暮らしやすくなるので、スタッフ、そして地域コーディネーターとして地域との連携を大事にして関わっていきたいです。

優々と語る2人

希望を胸に240名入学

4月8日、本校大体育館にて入学式が挙行された。創立100周年という節目の年に、理数科40名、普通科200名の計240名が新たに白河高校の一員となった。新入生は緊張した面持ちで式に臨んだ。新型コロナウイルス感染防止対策のため、昨年度に引き続き、国歌斉唱はCDを聞くのみとなり、新入生一人ひとりの呼名の際には返事の代わりに返礼をし、保護者は各家庭1名までの参加となった。感染対策への取り組みが十分になされた上で式が実施された。

矢森健一校長先生は、「新入生には白河高校という環境で、支えてくれる人への感謝を噛み締め、新たな学びに挑戦してほしい。失敗や挫折が数えきれないほどあると思うが、それも大きな経験となる。白河高校で過ごす3年間は人生の礎となる」と式辞を述べた。

また、新入生代表の塚本美優さん（1―2）は、「依然として新型コロナウイルスが猛威を振るう中、創立100周年を迎える白河高校の生徒になれたことを誇りに思う。登龍生の名に恥じぬよう、文武両道に誠心誠意取り組み、仲間と互いに切磋琢磨し合い、努力を積み重ねていく」と新入生誓いのことばを力強く述べた。

真剣な態度で式に臨んだ

成人年齢引き下げ

自由と課せられる自己責任

明治時代から約140年間、日本では成人年齢は20歳と民法で定められていた。そして、2022年4月1日から民法が改正され、成人年齢が20歳から18歳に変わった。民法改正の理由は、近年、憲法改正国民投票の投票権年齢や公職選挙法の選挙権年齢などが18歳と定められるなど、18歳以上をこのような重要な事項での判断能力がある大人として取り扱うのが適当ではないかという議論がされるようになったからだ。

現在、38カ国のOECD加盟国のうち30カ国以上の国が成人年齢を18歳と定めており、世界的にも成人年齢18歳は主流なのである。

また、成人年齢を18歳まで引き下げることは、18歳、19歳の人の自己決定権を尊重するものであり、少子高齢化が進む中、若者のこれからの積極的な社会活動への参加が期待できる。成人年齢の引き下げにより、18歳、19歳の人は、親の同意を得ずに様々な契約をすることができるようになった。例えば、ローンを組んで自動車を購入したり、クレジットカードを作成したり、携帯電話を購入したり、一人暮らしのためのアパートを借りたりといったことだ。親権に服することがなくなることで、自分の住む場所、進学や就職などの進路について自分で決めることができるのだ。もっとも、飲酒や喫煙、競馬などのギャンブルができる年齢については、20歳以上のままなので、注意が必要である。

未成年者の「労働契約締結の保護」について、労働基準法58条1項は、「未成年者に代わって親権者・後見人が労働契約を結ぶこと」を禁止としている。もし未成年者を雇用する場合、親権者・後見人の代理契約が未成年者本人の同意を得ていてもできないため、あくまで未成年者本人と労働契約を結ぶ必要がある。また、未成年者の「賃金請求権」について、賃金は未成年者に直接支払うことが必要で、親権者・後見人が未成年者に代わって賃金を受け取ることはできない。この2点については、成人年齢が18歳になっても変わらない。しかし、これまでと変わることもある。労働基準法58条2項では、親権者・後見人または所轄労働基準監督署長が「労働契約が未成年者に不利と認めるとき」は、将来に向かって労働契約を解除できるとされている。これは未成年者への「不利な労働契約」に関して、未成年者が犯罪やトラブルに巻き込まれないよう保護するためである。しかし、民法改正後からは、18歳、19歳の人はその対象外になるため注意が必要だ。

民法改正後、最初は戸惑うことも多いだろうが「何が変わったか」と「何が変わらないか」をしっかりと押さえて新成人への準備をすることが必要である。

登龍の睛

成人として持つべき自覚

成人年齢が20歳から18歳に引き下げとなったことにより、どんなメリットやデメリットが生じるのか。

メリットとしてはクレジットカードや携帯電話などを親の許可なしに契約できるようになったこと、取得できる免許や資格の幅が増えたことの2つがある。これにより、クレジットカードや携帯電話の契約を1人で行うことができるようになったり、司法・行政書士などの一部の国家試験に挑戦できるようになったりした。デメリットは、未成年者取消権が適用されないことだ。未成年者取消権とは、未成年者が親の同意を得ずに契約した場合、原則として契約を取り消すことができる権利だ。これにより、重大なトラブルへの発展を防いでいたが、18歳、19歳は権利の対象外となり契約も有効になってしまうのだ。さらにその契約を取り消すことはできない。

成人年齢引き下げにより、以前より早く何かに挑戦、何かを獲得できるようになった。しかし、未成年者であることによって守られていたものがなくなり、自己管理しなければならない場面が多くなった。これから成年になる人、今年から成年になった人は、自己管理しなければならない自覚と緊張感を持って生活してほしい。（柳沼結太）

論説

手を取り合うための解釈

とある数学の問題がある。「6÷2（1＋2）」という式だ。ここで、どんな答えになるか考えてみてほしい。これはあるSNSユーザーが出題し、多くの人が解答をするたびに2つの答えが出うるとして話題になったものだ。この問題は2011年頃からインターネット上で広まり、今でも答えについて論争が起きている。さて、どんな答えになっただろうか。おそらく「9」か「1」になるはずだ。出題者の意図としては「9」が正解で「1」は不正解という引っかけ問題のつもりであった。しかし、約342万人が解答した結果、答えが「9」になった人はおよそ149万人、「1」と解答した人はおよそ193万人だった。出題者の意図に反して2つの答えが出てしまったこの問題。ネットユーザーだけでなく数学者によっても解答は1つにまとまらず、さらに論争を白熱させることになった。

この問題の答えが2つになりうる理由は計算の観点にある。ごく簡単に言ってしまえば、「（1＋2）」の計算結果は「3」であり、これにより問題の式を「6÷2（3）」と表せる。そしてこの「2（3）」をどう解釈し、計算するかで答えが変わってくる。「2（3）」に「×」が省略されているだけだ熱させることになった。

ここで重要なのは、この問題の答えを「9」としていた出題者が「6÷2×（1＋2）」と表記せず、「6÷2（1＋2）」として「×」の記号を省略してしまっていたことにある。答えを「9」にするには、「×」を付け加えることが必要であった。「×」が省略されてさえいなければ、計算観点が四則演算的観点に一方化されず、2通りの解釈は生まれず、論争に発展することもなかったであろう。この問題では「×」の省略という不確定要素が解釈の差異を生んだ。しかし、不確定要素が異なる解釈を生むのはこの問題だけでなく、万物に共通していることではないだろうか。

そのことを多角的に分析するために、まず、解釈の意味について見ていこう。日本のキュレーターで、現代美術を専門としている美術評論家の成相肇は解釈についてこう考えている。「1つのテクスト、すなわち表現（特に、不確定要素の多いもの、難解なもの、未知なもの）は解釈する際『解釈者にとって』という前提が存在する。それによって共存する解釈もあれば、当然背反関係にあり対立する解釈もある」成相は解釈のもつ許容範囲の広さについて分析している。彼の分析により、筆者は解釈の許容範囲について、解釈者がテクストをどう受け取ったかによって無限にも広がるものだと考える。また、解釈は解釈者自身の持ち合わせている教養、性格、意志、背景などがそのまま投影されるものであるとも考える。なぜなら解釈をする際には解釈者の持っている知識でテクストを汲み取るからだ。その知識を構成するのは前述した要素である。そう、解釈は人それぞれであり、大事なのは解釈を否定するのではなくその多様性を理解することだ。

この前提を踏まえつつ、後述することを行わないでほしい。「解釈は人それぞれである」という事実だけで止まってしまうことだ。「これは自分の解釈だから間違ってなどいない」と他人の言葉を拒むこと、「これはその人の解釈だから手出しはしない」と無関心な態度を取ることは、考えることを放棄するのと同義である。せっかくの解釈がもつ許容度の広さを無碍にしてしまっては意味がない。前者の場合、相手が自分の解釈をどう受け取ったか推量すること、後者の場合、相手がなぜその解釈をしたか推量することが大切なのだ。自身の解釈と他の誰かの解釈を照合することによって初めて解釈の許容範囲の広さを認識できる。

解釈について説明したところで、論を戻そう。筆者は不確定要素が異なる解釈を生むと講じた。解釈はその主語が大きくなることで解釈者が国や宗教などになる。「その国の人々の考え方すなわちその国の文化、その宗教者の考え方すなわちその宗教観」だ。そこで1つ、国の文化の違いについて例を挙げよう。日本と海外の食事の違いについてだ。日本では一帯に、食事を作ってくれた人への感謝を示すためにすべて残さず食べることがマナーとされている。一方、中国や韓国といった国では食事を完食してしまうのでなく、あえて少しだけ残すという文化が見られる。これも食事を作ってくれた人への感謝である。「お腹がいっぱいになるほど美味しい。もう食べられないくらい満足だ」という気持ちを表してるのだ。『食事』という概念がこの2つの解釈の差異を生み出している。概念的なものは漠然としているという特性上、不確定要素が多い。この食事の例も不確定要素によって引き起こされる文化（解釈の集合体）の違いであると言える。

以上の点をまとめると、不確定要素は違う解釈を生むが、解釈の多様性を理解し相手がどんな解釈をしたか推量することが大切だ。相手の解釈について理解しようとする行為は、「その人を知ろうとすること」につながる。LGBTQやロシアによるウクライナ侵攻に関心が集まっている今、我々に必要不可欠なのは「その人を知ろうとすること」なのだ。（大竹　翔）

ここがすごい文化部

第3回　写真部

今回私たちは写真部に所属している関山翔太さん（2―4）にインタビューを行った。写真部は普段から月数回のペースで個人での撮影活動を、週1回のペースで部全体で鑑賞会やフィールドワークを行っている。しかし今の部員は写真部の活動内容を改善したいのだという。具体的には、フィールドワークを月1回くらいのペースで行い、月に1回か2回は南湖公園や小峰城などに行き、写真を撮りたいとのことだった。現在は不定期で写真の撮り方などの技術について学ぶ勉強会も行っているという。

少し前までの写真部は30人ほどの部員がいてその頃は全国大会にも出場しており、職員玄関前に飾ってある写真もその頃のものだという。今写真部が目標としている県高校総合文化祭は、県大会を通ればそのまま全国大会に出場できる。今後も他の大会、コンクール等に積極的に作品を提出して、優秀賞以上を狙っていき、最終目標である県高校総合文化祭へ向けて活動をしていきたいと関山さんは語った。

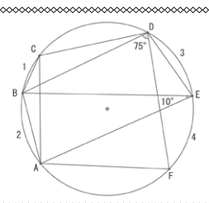
私たちは関山さんに、写真部が出場した「写真甲子園」の中で最も良く撮れた写真を尋ねた。そこで関山さんはこの、青空の下で走り出している子どもの後ろ姿にシャッターを切った写真を見せてくれた。そのほかにも、指輪をモチーフにした夕日の写真なども紹介してくれた。

写真部は品評会も行っており、どの写真が良いか投票を行い、票が多かった写真などは活動場所である地学実験室前に展示しているそうだ。

品評会とともに撮影会も行っており、関山さんは「専門の方々からご指示をいただける貴重な経験である。次の写真を撮影する際に得た知識を活かせる、いい機会だ」と語った。関山さんの、部活動について「撮らないと腕が上がらない」という言葉は写真部としての自覚とやる気を感じさせる一言であった。

生き生きとした子供らしさを感じさせる一枚

出版委員からの挑戦



弧AB：弧CDを求めよ

人々を感動させる演奏を

吹奏楽定期演奏会

5月15日、白河文化交流館コミネスにて本校吹奏楽部による第25回定期演奏会～With　音楽と共に歩む～が開催された。入場時の検温や観客の連絡先を記入した半券の回収により、万全なコロナ対策をとった上での開催となった。チケット代は無料で、当日会場には多くの人が足を運び、ほぼ満席となった。

公演は2部構成で、1部では第60回全日本吹奏楽コンクール課題曲にもなった「さくらのうた」や世界の平和を願う「Dona Nobis Pacem」などが演奏された。2部ではスイングジャズの「Sing Sing Sing」やシャンソンの「愛の讃歌」などが演奏された。そして2部の最後にはドラマやアニメの主題歌、歌謡曲やゲーム音楽などで構成された、吹奏楽部オリジナルの「白高ヒットパレードⅢ」が披露された。本公演では演奏だけでなく部員によるダンスや寸劇、さらには観客が手拍子を取ったりペンライトを振ったりなどして会場一体となって音楽を楽しんだ。

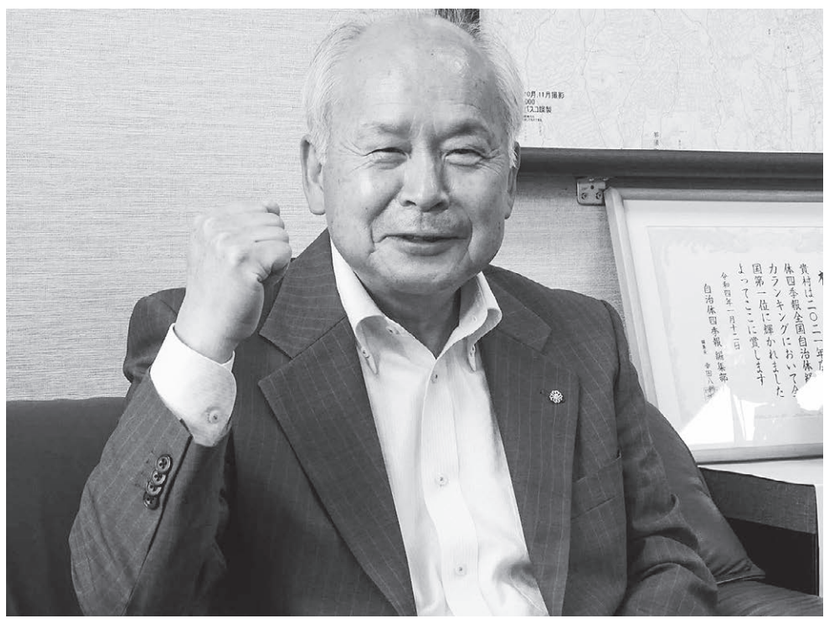
吹奏楽部は、聴く人が感動するような音楽を奏でることを目標としている。会場入場時、観客には部員や演奏曲が紹介されたパンフレットが手渡された。そのパンフレットには部員の目標達成のための努力も記載されていた。また、1年生16人を新たに部員に迎えた今回、5月という通常より早い開催時期ではあったが全員が技術向上に取り組んで本公演を迎えたという。パンフレット編集委員長で部長の緑川咲希さん（3―5）は「支えてくれた人への感謝を胸に、聴いてくれた人の心を癒せるような演奏を届けたい。また、本公演を通して吹奏楽への興味や関心を持ってもらえたら幸いだ」と挨拶を述べた。そして本公演実行委員長の寺山華さん（3―2）は「テーマに、聴いてくれた人に幸ある日々を送ってほしいという意味を込めた。コロナ禍ではあるがマイナスな気持ちを吹き飛ばす音楽を部員一同心を込めて奏でたい」と語った。本公演終了後には会場が温かい拍手で包まれ、演奏を終えた部員は笑みをこぼした。

プラタナス

絵が持つ力とは何であろうか。我々は絵を見たとき、ただ綺麗だと思うだけでなく、そこから作者の言わんとする事を汲み取ろうとすることがよくある。1つ例を挙げよう。スペインの画家であるサルバドール・ダリの抽象画の代表作に『記憶の固執』というものがある。この作品からは、不安、或いは欲望なども感じられるかもしれない。絵画というのは、直接言葉で言うより強いメッセージを孕むことが往々にしてある。そのため、絵が世の中に大きな変化をもたらすことがあるのだ▼世の画家たちは、現在のコロナ禍をチャンスと言わんばかりに作品を描いている。スイス出身のヴァロットは、現在その風刺画で注目されているイラストレーターの一人だ。彼はこの未曾有の混乱を、ユーモア混じりにユニークに表現する。例えば、葛飾北斎の神奈川沖浪裏をオマージュし、オリンピックのロゴが乗っている船が、今にも波に飲まれそうなイラストを制作している。これは、コロナで延期となった東京2020を表しているそうだ。そして彼は、決して人々の不安を煽るような絵は描かないと言っていた。あくまで自分の頭に浮かんだものを描くだけだと▼また、このコロナ禍で窮困した人々を勇気づける絵も存在する。代表例はバンクシーが描いた医療従事者への感謝を表すグラフィティだ。言うまでもなく、このコロナにより多大な影響を食らったのは医療従事者だ。皆自分のことで精一杯で、単純な感謝を忘れていた。そのため、バンクシーが描いたこの絵は、多くの医師や看護師に、活力をもたらしたことであろう。絵、というのは、よく考えればとても単純なことだ。しかし、その歴史は1万年前にも遡る。ただ線をつなぐ、色を付ける、それだけのことだが、それは太古から人類に刻み込まれた、いつの時代も消えることのない遺産なのかもしれない▼このコロナ禍で、家にいることが多くなった今、自宅に絵を飾ることでリラックス効果を得ようとする人も少なくない。淡い水彩の風景画は、心を落ち着かせ、力強い油絵の動物画は、活力をもたらしてくれる。故に我々は絵の不思議な力に期待するのかもしれない。この機会に、絵が持つ魅力を再認識するのも良いのではないだろうか。（古賀舜也）

西郷村長インタビュー　県南共栄で作る未来

国民的大人気グループＴＯＫＩＯが西郷村に新たな活動拠点「ＴＯＫＩＯ－ＢＡ（トキオバ）」を設置した。この活動拠点で何をするかは決まっておらず、全国の人からアイデアを集め、それを元に作り上げていくプロジェクトである。そんな、「ＴＯＫＩＯ－ＢＡ」の活動拠点に選ばれた西郷村の高橋廣志村長にお話を伺った。


喜びの表情を見せる高橋村長

西郷の魅力

高橋村長はプロジェクトの拠点が西郷村に選ばれたことに対して率直に「うれしい」と答えた。西郷村に決まった事が正式に発表された時には、村役場には西郷村民からの「西郷村が選ばれて光栄だ」というたくさんの喜びの電話が届いたという。

一面に田園風景が広がり、那須連山が望める自然に囲まれた場所でありつつも、全国の村で唯一である新幹線停車駅の存在をはじめとする交通インフラの良さや、駅前のマンション群などの都会としての側面も持つ西郷村のハイブリッド性がプロジェクトの拠点に選ばれた理由ではないかと村長は考えているという。また、西郷村は昨年、株式会社コウダプロが掲載している、「自治体四季報」の全国の自治体の人口増減率、地方税収増減率、財政調整基金増減率、人口一人当たりの人件費を総合的に評価したランキングである「全国自治体経営力ランキング」で第1位に輝いており、そのような経済面での強さも西郷村の魅力のひとつではないかという。

選ばれる西郷、誇れる西郷

次に、今回のプロジェクトで期待することについて伺った。高橋村長は、プロジェクトをきっかけに西郷村の魅力を知ってもらい、西郷村へ移住する人や観光客が増え、「選ばれる西郷」になること、また、大学への進学や就職のために西郷村から都会へ出ていった人が、プロジェクトを通して故郷が活躍しているの見て感動するような、「誇れる西郷」になることを期待していると語った。

また、村長は、西郷村だけが注目を浴びるのではなく、白河市、泉崎村、中島村、矢吹町、棚倉町、矢祭町、塙町、鮫川村の県南８市町村も巻き込み、大きなスケールをもって協力してプロジェクトを作っていって欲しいと語った。現代の日本において、地方自治体の人口減少とそれに伴う経済の衰退、税収の減少は大きな問題となっている。そのなかで、自治体を運営していく上で大切なことのひとつは、周りの自治体との連携であるため、プロジェクトでも自治体同士連携しあい、大きなふくらみをもって作っていくことは、県南地域発展の無限の可能性を秘めているという。また、プロジェクトによって西郷村は全国の人から注目されることが予想されるが、それは一過性のものではなく、恒常的なものであるべきで、西郷村が長く愛されるようになってほしいと村長は語った。

工事が進むTOKIO-BA

みんなでつくる県南地域

ＴＯＫＩＯ－ＢＡのホームページには次のようなことが書いてある。「みんなと作るプロジェクト。アイデアを持ち寄り、広く繋がり、チームになって、輪になって、育む喜びを分かち合う」このプロジェクトではみんなで作るというコンセプトを強調している。これは高橋村長が大切だと考えている、自治体同士の連携に通ずるものがある。村長は「自治体同士が一体になって作っていくことは、何が出てくるかわからない面白さがあり、県南地域に計り知れない効果を生み出す」と語った。真っ白な約８万平方メートルのキャンバスに、みんなが連携して描き、作り上げていく、このプロジェクトは西郷村、県南地域発展の起爆剤となるだろう。

白高、歴史を重ねて

様々な図書が並ぶ文庫の一角

嶋倉晃文庫（以下、嶋倉文庫）は、平成２年（１９９０年）に白河高校図書館に設立されて以来32年間続く寄贈図書であり、古典文学の全集から現代の論説本まで、幅広い図書を扱っている。これらの図書は多くの生徒が手に取り、読むことにより、感性や知識を磨くための重要な材料となってきた。

そのような嶋倉文庫は、本校の卒業生である嶋倉晃氏によって本校図書館に平成２年に設立された。『母校に図書を贈る運動』、この活動には、「後輩のため、本を役立てて欲しい」という卒業生達の願いがあり、嶋倉氏も東京登龍会（本校同窓会の東京支部）及び東京しらかわ会の事務局長として参加していた過去がある。〝本を役立てる〟というのは、本を読み、その知識を勉学や人生のために役立てて欲しい、ということだろう。そのため嶋倉氏は、この願いを受け継ぎ、本校へ図書を寄贈し、嶋倉文庫を設立したと考えられる。

嶋倉氏が個人で初めて白河高校へ図書を寄贈したのは平成元年。その際は20万円相当の図書の寄贈をした。寄贈図書は年々増え、直近10年間は50万円相当の寄贈、図書の数としては平均１５０～２００冊を寄贈している。平成２年～令和４年現在において、寄贈本の総数は５０２４冊、値段にして１６４０万円相当になる。図書の系統としては、寄贈を始めた平成初期は古典文学の全集や百科事典などが多く、令和４年現在においては人類史などの歴史本、社会問題についてなどの論説本が多く寄贈されている。本校教員が生徒に読ませたい図書を選択し、その図書を嶋倉氏が寄贈するという形をとっているため、教員には、近年の社会問題に目を向けて欲しいという狙いがあるのだろう。

図書館の司書によると、毎年、福島県から図書を購入するための補助金が支給されるそうだ。しかし、それだけだと欲しい図書を厳選した上で購入をしなければならないため、必然的に購入できる量が少なくなってしまい、全集のような高価格の図書は選択しにくいという。嶋倉文庫の存在により、図書選択の幅が広がり、図書館の図書を充実させることができ、魅力を高めることが出来るそうだ。嶋倉文庫は図書館にとっても、それを利用する生徒にとっても重要な役割を果たしていると言えるだろう。

そんな嶋倉文庫だが、嶋倉氏がご高齢ということで、創立１００周年を迎える今年度が最後の寄贈となるそうだ。嶋倉氏が「本を読んで欲しい」という願いの下に寄贈し続けた嶋倉文庫の図書達を、図書館に立ち寄った際に手に取り、読んでみるのはどうだろうか。そうすればあなたの中に、読んだ数だけ知識として積み重ねられ、今後の人生に役立つ時が必ず訪れるはずだ。

67年前の友へ　甲子山遭難慰霊式

１９５５年５月29日、本校山岳部生徒15名、引率顧問１名が那須連山の登山を試みた。しかし、悪天候により、那須甲子縦走路からの下山中に部員６名の尊い命が犠牲となった。その甲子山遭難事故から67年が経った。甲子山遭難慰霊式は、白河高校創立１００周年の記念事業の一環として今年５月30日に行われ、事故当時に本校に通っていた多くのＯＢとその関係者が足を運んだ。慰霊式には、本校職員と山岳部も参加し、山岳部の生徒たちは創立１００周年記念事業記念誌の別冊である、「星六つ」をＯＢ達に手渡した。星六つは遭難事故後に制作されたものであり、遭難事故の背景などについて詳しく記されている。

慰霊碑の前で献花するOB達

全員が慰霊碑の前に並び、厳粛な雰囲気の中、慰霊式が行われた。慰霊式実行委員長の鈴木雅文さんは慰霊碑に深々とお辞儀をし、「人間は自然の中では弱い存在に過ぎない。このようなことを決して繰り返さないように努める」と語った。亡くなった６人の、家族・友人代表者である、吉田公弥さんの言葉では、「組織は今年で解散だが、悲劇を自分のものと感じ、亡くなった彼らの分も生き抜かなければならない」と語った。67年前の６人の将来や夢が潰れた惨劇を知る人や後世にそれを伝える人がわずかとなった今、ＯＢ達は本校生徒に「自然に謙虚に」と諭した。慰霊碑の中には阿武隈川の石が入っている。事故当時に白高生が一人一個ずつ阿武隈川から石を運んだという。その石一つ一つに当時の白高生の想いが込められている。そして、献花では関係者、職員、最後に山岳部の生徒が５名ずつで慰霊碑の前で白い菊を献花して深々とお辞儀をし、祈りをささげた。そして、遭難事故後に制作された「あゝ遭難の白高生」がＣＤで再生され、式に参加した全員が粛然な面持ちで聴いていた。

創立１００周年記念事業誌の星六つのタイトルは、「あゝ遭難の白高生」の歌詞から取ったものである。最後に、６人の犠牲者の冥福を祈って黙祷をし、甲子山遭難慰霊式は幕を閉じた。

本校生徒は、亡くなった６人とＯＢが残したものを心に留め、これからも未来へ受け継いでいく。

登龍の睛

地方自治体の生存術

現在日本に存在する自治体の約３割が人口１万人に満たない自治体である。こうした自治体は近い将来、高齢化やインフラの老朽化によって行政需要が増える一方で、急激な人口減少により、各自治体の経営資源は減少し、生活を営む上で大切な行政サービスを維持することが困難になると予想される。そこで必要になってくるのが、地方自治体同士の広域連携である。

広域連携とは、従来の市町村や都道府県などが、行政区域を越えての連携、それぞれが有する資源の融通をしあって効率的に行政サービスを提供するという考え方である。広域連携の主な事例として施設の共同整備が挙げられる。秋田県が運営する秋田県民会館と、秋田市が運営する秋田市文化会館は老朽化により、ともに建て直す必要があった。そこで県と市は、整備費及び、管理運営費を削減するために２つの施設の機能を集約した施設、「あきた芸術劇場ミルハス」を建設した。こうした連携文化施設はコストを削減できるだけでなく、様々な種類の施設が集約されることで、今までにない大規模な利用が可能になり、様々な機能がひとつの建物の中にあるため利便性も向上する。いわば、文化施設のショッピングモール化である。

また、この考え方を基にした、広域連合という自治体同士が運営している組織がある。広域連合のひとつ、長野県の自治体で構成されている上田地域広域連合では、介護や、ごみ処理施設・葬儀場の運営、消防業務などを行っている。これらの事業は、生活に欠かせない要素であるが、一定の需要がなければ稼働率が低く、効率性も悪いため、地方自治体単体での維持は極めて困難である。しかし、自治体同士協力して運営することにより、安定的、持続的、効率的かつ効果的に提供することができる。

今後日本はさらなる急激な人口減少社会に突入し、自治体の財務状況は厳しいものとなるだろう。しかし、自治体独自でそれらの課題に対処していくのは困難である。そこで、十分な行政サービスを提供するため、各自治体が特性を生かしながら連携し、地域の魅力を出していくことが今後の日本社会に求められている。（鈴木　樹）

クローズアップ白高生　涙の果てに成し遂げた偉業

去年11月14日に行われた第10回日本学校合奏コンクール２０２１のアンサンブル部門においてコミネス交響楽団ジュニアアンサンブルストリングスの福田海月さん（２－４）が団体で出場し、演奏曲「リュートのための古風な舞曲とアリア第２楽章」で金賞・文部科学大臣賞を受賞した。福田さんは、バイオリンのパートで活躍した。

福田さんが音楽を始めたのは小学３年生のときだ。母親から勧められたことと、以前から先輩たちへの尊敬の念があったことから白河第一小学校の器楽部に入部した。音楽を始めた当初は楽しさを感じることができず「やめたい」と思ったことがあったが、小学５年生のときに出会った恩師の存在によってだんだんと音楽の楽しさに気づき始め、現在音楽は大好きだそうだ。

また、今回の受賞に至るまでには様々な苦労があったという。部活動と勉強の両立が難しく体調を崩してしまったことや、本番まで練習が少なかったうえに全員で集まって練習するのが厳しかったこと、演奏曲は楽しいが演奏するのが難しかったことなどを語ってくれた。それでも、支えてくれたのはいつも一緒にいた楽団の仲間や、保護者、そして先生だったという。福田さんの周りには小学校のときから器楽の縁で福田さんを知り、支えてくれた人が多くいた。小学校のときに器楽部の東北大会であと一歩というところで全国大会出場を逃してしまった。その悔しい思いを知っているからこそ、今回、全国の舞台でこの「金賞・文部科学大臣賞」を受賞したときには、支えてくれた人たちが人一倍泣いて喜んでくれたそうだ。福田さんは、今回の大会でそのことが特に印象深く、嬉しいことだったという。

福田さんと彼女の生きがいであるバイオリン

現在福田さんは、毎週土曜日に白河文化交流館コミネスで練習をしていて、音楽を通して学んだ「周囲への感謝」を常に胸に抱きながら、自身の技術向上を目標にして練習をし続けている。福田さんの使っているバイオリンを含めた演奏道具は、すべて高額なもので、その中でもバイオリンのケースは自身で購入したものらしく、使う演奏道具にはこだわりがあるのだという。また、福田さんの部活動での人柄を聞いてみると、「真面目」や、「何事も全力で諦めない」姿がうかがえた。普段からのこのような福田さんの姿勢がこの偉業を成し遂げさせたのだと感じさせる。今後の抱負について福田さんは、「今回は成し遂げられなかった部活動と勉強の両立をしながらも、後輩に教えてあげられることを精一杯教えてあげようと思う」と語っていた。

取材の最後に福田さんは、誇らしげな表情で「バイオリンは、私にとって宝です」と語った。

つなぐ、紡ぐ、震災の記憶

本校２学年の生徒が有志で結成した「震災復興しらかわゼミ」という団体が活動を行っている。昨年度の１月６日には、東日本大震災で甚大な被害を受けた浜通りを訪れるバスツアーを開催し、東日本大震災・原子力災害伝承館や、請戸小学校などを訪れた。また、３月にはそのツアーで訪れた場所について、ゼミのメンバーの感想を綴った新聞を発行した。

そんなしらかわゼミだが、今年６月には今後の活動についての説明会を行い、新たなメンバーが仲間に加わった。今年度の活動としては、昨年度が情報を「集める」ことがメインだったのに対し、「発信する」ことをメインに計画を進めていくという。現状はメンバーが２学年の生徒のみであるが１学年からも参加を募り、さらに大きなスケールで活動を行っていくそうだ。計画している活動として、本校を拠点に、特に震災に関わりのある地域の高校との交流会を予定しているという。参加校は、首都直下型地震が危惧されている東京都のいずれかの高校、胆振東部地震などの被害を受けた北海道のいずれかの高校、阪神・淡路大震災に襲われた関西のいずれかの高校、そして、本校と以前から交流のある熊本北高校である。本校はその４校の架け橋となる役目を担っていくという。

単なる防災活動だけでなく、被災した人の声に耳を傾けることに意味があるとして、メンバーは積極的にインタビューや取材を行っていくそうだ。

本の紹介　今、読みたい愛の物語『アーモンド』

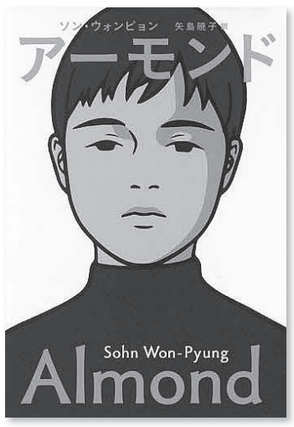
普段読書をしない人にぜひ読んでほしい本がある。約３００ページで会話文が多いのですぐに読める。筆者自身全く読書をしなかったがこの本をきっかけに毎日読書をするようになった。とにかく、筆者が言いたいのは「この本には魅力がある」ということだ。

では、そんな優れた本とは一体なんなのか。

本校図書館にもある「アーモンド」（作者：ソン・ウォンピョン）だ。その概要を伝えたいと思う。

人間は誰しも脳に感情をつかさどる扁桃体をもつ。しかし、主人公の少年は、その部位がうまく機能しておらず生まれつき感情が欠落していた。少年は、ある日家族を失ってしまうが、それでもやはり少年に感情がわくことはなかった。そんな主人公は、「怪物」と呼ばれる少年、「博士」と呼ばれる元医者のパン屋の店主、大好きな陸上が思いどおりに走れない少女との出会いを通じて、少しずつ変わっていく。そして最後には数々の衝撃の展開が待ち受けていた。

この本には、筆者がおすすめだと思う読み方がある。ぜひ、まず最初にこの本の表紙をみてほしい。感情の虚無をうかがわせる主人公の少年がいる。その表情を頭の中に残しながら読み進めていってほしい。そうすることによって、この本の最後の場面での少年の成長具合に胸を打たれ、印象深く思うはずだ。



世界的なパンデミックにより人との関わりが減った今だからこそ、改めて周囲の人たちを大切にする意味をこの本を通して考えてほしい。周囲の人たちに対する日々の気持ちを大切にすることで、どんな困難も乗り越えられるだろう。

時代に合わせた勉強法

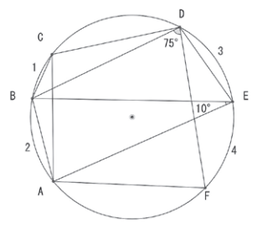
あなたは「勉強垢」というものを知っているだろうか。「勉強垢」とは「勉強アカウント」が省略されてできた言葉で、ＳＮＳで勉強に関することを呟いている人のアカウントのことである。最近の中学生・高校生を中心に既に定番化している勉強垢だが、「勉強をしながらＳＮＳなんて言語道断！」と思う人もいるのではないだろうか。だが、勉強垢というものはネットが広まっている今の時代に勉強のやる気を上げたり、悩みや不安を解決したりするためにはとても効果的なものであるのだ。ここでは、成績を上げるための「勉強垢」の使い方やメリットについて詳しく紹介していきたいと思う。

まず、「勉強垢」を活用すると、一緒に頑張れるライバルができる。勉強垢を作っている人は「○時間勉強した」といったことをアカウント上で発信する。そして、縁があれば同じ志望校のライバルを見つけることができるのだ。これは、同じ学校に一緒に高め合う仲間がいない人にとっては非常にメリットがある。次に、勉強垢では情報を簡単に手に入れることができる。また、勉強垢を作ることで、大学受験に関する情報や勉強についての豆知識などを得ることもできる。「周りはこんなに勉強しているのか」「こういう勉強法があるのか」といったことも周りの口コミで簡単に知ることができるのだ。ただ、オシャレな投稿をしようとして時間をかけるなどしてしまうと本末転倒である。それに、勉強中はＳＮＳを開かないようにすることが、当たり前のことであり、大切なことだ。つまり、ＳＮＳには、メリットもあるがデメリットもあるということだ。

今の時代、ほとんどの高校生がＳＮＳを使っている。依存気味になっていて、スマートフォンでのＳＮＳが手放せなくなっている人もいるだろう。これは良くないことだが、この状況を逆手に取り、ＳＮＳを活用して勉強の効率を上げてみてはどうだろうか。もしかしたら、今までの勉強法より、格段に効率が上がるかもしれない。「勉強垢」を正しく使えば、自分のモチベーションや効率を上げることができるひとつのツールにもなる。ぜひ勉強垢を上手く活用して、良い受験生ライフを送ろう。

出版委員からの挑戦　解答

角BDC＝角BAC＝５°
角DBE＝１５°　角EDF＝角EAF＝２０°
角BDE＝９５°　より角EAB=８５°
よって
角ABE＝８５°、角DEB=７０°
弧ABの円周角が１０°、弧BDが７０°
弧CDが６５°となり、弧AB：弧CDは２：１３



2度甦る小峰城

白河駅のホームからその迫力のある姿を見ることができる、白河観光の顔である小峰城は、今から約７００年前、南北朝時代にその歴史が始まった。江戸時代初期には城郭の大改修が行われ、現在の石垣と三重櫓が完成したが、戊辰戦争で城の大部分が焼失した。その後、１９９１年に三重櫓、１９９４年に前御門が復元されたが、それから17年後の３月11日に発生した東日本大震災により、石垣や曲輪の一部が崩壊する被害を受け、本丸への立ち入りが禁止された。秋には修復工事が開始され、２０１５年ごろから入場可能となり、２０１９年には石垣の修復が完了した。また、白河市は本丸正面にあった清水門の復元を目指し、２０２４年の完成を目標としている。

夜の白河に佇む三重櫓

小峰城は、戦争や災害などの被害を受けながらも、小峰城を愛する人たちの手によって２度にわたる修復を経て、数百年前の姿を我々に見せているのである。

東北の玄関口、県南の魅力発信

５月13日、東北の玄関口、ＪＲ新白河駅の東口に新たな階段アートが登場した。現地で行われた完成披露会には、ふくしま県南観光推進協議会長である鈴木和夫白河市長や、新白河駅の小林徹駅長、県南振興局の沖野浩之局長、そして西郷村の高橋廣志村長が出席した。

この階段アートは４月１日から６月30日まで行われた観光キャンペーン「巡るたび、出会う旅。東北宮城・山形・福島」に合わせたものだ。「魅力特盛り！しらかわ」をテーマに、白河ラーメンのどんぶりの中に県南９市町村の観光スポットやその地域ならではのものが詰め込まれたデザインとなっている。泉崎村から出土し、全国的にも有名な「力士像埴輪」や、著名な彫刻家の小松寅吉が自身で奉納したとされる、中島村の「川田神社の狛犬」、水・花・緑が香る公園として町民のやすらぎの場所となっている、矢吹町の「大池公園」など、市町村の名物・名所が色鮮やかに描かれている。階段アートの大きさは、高さ５・７メートル、幅３・９メートルに及び、立ち止まって眺めたり、写真を撮ったりする人も多く、注目度の高さをうかがわせた。

お披露目された日は、３月に発生した福島県沖地震の影響により臨時運行を続けていた東北新幹線が２カ月ぶりに通常ダイヤでの運行を再開した日でもあった。また、今年は東北新幹線開業40周年、そして日本の鉄道開業１５０周年でもあり、新幹線や電車・鉄道に関心が集まっているなかでのお目見えとなった。

完成披露会で鈴木市長は「県南９市町村にはそれぞれに魅力や特徴がある。ここ新白河駅から各市町村に出て行ってもらい、ぜひ色々な観光を味わってもらいたい」と挨拶を述べた。階段アートは来年の５月末まで展示される予定だ。

編集後記

今号もたくさんの方のご協力のおかげで紙面を完成させることができました。深く感謝申し上げます。

今年、本校は創立１００周年を迎えました。長い歴史の中で、２００号を超えて本紙を発行できていることは、先輩方の弛まぬ努力によるものであると強く感じています。私はこれまでの委員長とは異なり、決して優秀とは言えない委員長でしたが、委員に支えられて完成まで漕ぎ着けることができました。伝統ある本校の新聞制作に携われたことを誇りに思います。

私は今号を以て編集部を離れるが、委員には今後も新聞を作ることの意義を考え続けてほしい。本紙の歴史が途絶えることなく、この先も続いていくことを願っている。

２年生になって初めての新聞作成は、１年生の時と比べてすることが多く大変でしたが、昨年度の経験を活かすことができたと思います。しかし、先輩方のような素晴らしい新聞には程遠く、まだまだ至らない部分が多く見られました。ですのでこれからも、日常のあらゆることにアンテナを張りつつ新聞作成の技術を磨いていき、輝いて見えるような新聞を作っていきたいと思います。（鈴木　樹）

【編集員】
３－１　邊見汐里
２－１　鈴木　樹
中西晴香
２－２　大竹　翔
２－３　遠藤芽唯
２－４　瀬谷太志朗
２－６　金澤桜介
１－１　古賀舜也
１－２　森本哲平
１－３　柳沼結太